

Title	「三・一独立運動と民族自決主義」：ソウルセミナー報告(総合研究所 News：日韓教会交流研究)
Author(s)	聖学院大学総合研究所
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.4, 2012.2：36-37
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3698
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

日韓教会交流研究
「三・一独立運動と民族自決主義」
ソウルセミナー報告

2010年に開始された韓国・長老会神学大学校との共同研究「日韓関係100年〈1910-2010〉と日韓キリスト教会に関する日韓共同研究」（日韓教会交流史研究）は、「日韓のキリスト教史を、1910年を起点に、日韓関係の未来に向けて前向きに捉えなおす。北朝鮮、中国を視野に入れ、北東アジアのキリスト教会のこれからの交流と協力の基盤を築く。また研究の基礎に第二次世界大戦後に制定された日韓両国の『憲法』研究を置く」を目的に国際共同研究として実施されている。

第一回の共同セミナーは聖学院大学（聖学院本部を会場）で2011年2月1日に開催された（「Newsletter20-5,2010」に報告）。

第二回の共同セミナーが、ソウルの長老会神学大学校ルース国際会議棟2階会議室で11月25日に



李致萬氏（長老会神学大学校研究教授・右）の講演にコメントを述べる松谷好明氏（聖学院大学総合研究所教授・中央）

開催された。主題は「三・一独立運動と民族自決主義」であった。発表1は、長神大、李致萬研究教授が、「三・一運動の準備過程とキリスト者の役割」について講演し、聖学院大学総合研究所の松谷好明教授がコメントをした。李教授が学位論文に基づいて、三・一独立運動に果たしたキリスト者の役割を強調したのに対して、松谷教授は、キリスト者といってもキリスト教信仰に基づいた行動であるかは、慎重に研究する必要がある、と資料の扱い方にも批判を向けた。

発表2は、聖学院大学総合研究所、松本周助教授が「1910年代の韓日教会とリベラル・デモクラシー」について講演した。北朝鮮の人民民主義と対峙している韓国では、リベラル・デモクラシーに対する賛否両論があることが指摘されたが、このような状況だからこそ、リベラル・デモクラシーを掲げる憲法の精神から両国の教会の交流の基盤を見出すべきとの内容であった。コメントは、長老会神学大学校のパク・ヨンクォン講師で、松本助教授の提起したリベラル・デモクラシーを真正面から受け止めてコメントした。

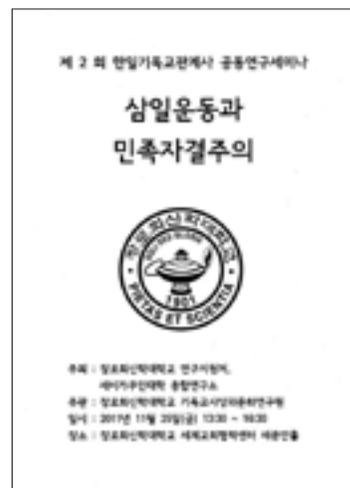
本研究は、日本の朝鮮半島の併合百年という時期に開始された共同研究であり、重い主題であるが、共通の基盤として、リベラル・デモクラシーがあることが確認され、よい共同研究の場となった。

議論は、松谷好明教授の「三・一独立運動は、李教授の主張のようにキリスト者による運動といえるか」というコメントに対して、李教授が反論するなど、厳しく議論する場面もあったが、会議

は、将来に向けた、新たなる日韓教会の交流がなされるべきとの方向性が確認されるものとなった。

参加者は、長老会神学大学校の教授、外部からの参加者が20名、大学院生が50名と、会場を埋める多くの参加者があった。特に、長老会神学大学校が歴史神学、実践神学、などと神学分野ではっきりと分けられているので、歴史神学にあたる分野のセミナーに実践神学、組織神学関係の教授たちが参加したことは異例のこのようで、このことから長老会神学大学校教授たちのこのセミナーを重視していることがよく分かった。今後の交流の基盤をつくるために重要である。

なお、第三年度にあたる2012年は、聖学院大学を会場に主題を「1945年以降のデモクラシー憲法と両国教会・世界情勢」として共同研究セミナーが開催されることになっている。



第2回「日韓キリスト教関係史共同研究セミナー」資料表紙



松本周助教授(右)とコメントーターのパク講師(中央)、司会のソ・ウォンモ教授。